

市澤先生の思い出〜ご着任のころ〜

押木 秀樹

一九八二年の秋から冬にかけてのことだったと思います。千原先生がめずらしく書道教室にやっつて来られ、たむろしていた私たち学生の前に腰を下ろされました。ほつとしたような、うれしそうな笑顔をしていらしたのを覚えています。そして、まだ君らには詳しいことはいえないが、新しい書道の先生が決まった。君らにとつて最高の人だよ、とおっしゃったのを覚えています。おそらく、教授会で人事が決まってすぐに来て下さったのではないかと思えます。そのうち、新しい先生は日展で活躍されているすごい方だ、という噂が聞こえてきました。私たちは期待しつつも、一方で近寄りたいたいすぎず先生のイメージが形成され、緊張感もかなりのものでした。

はじめて先生にお目にかかったのは、前任の塚田先生の退官祝賀会の時ですから、三月頃の厚北館であったと思います。当時私は三年生になるところであり、四年生の先輩とともに、ご挨拶させていただきました。「すご

ぎる」という先入観と異なり、大変穏やかでやさしく接していただき、ほつとしたのを覚えていきます。

ご着任後、私たちは先生が筆をとられるお姿を拝見し、お話をうかがうことになりました。先生の書の美に対する姿勢やセンスのすごさが、徐々に、私たちにも伝わってきました。先生の臨書の正確さは世界一ではないか、と思ったの思い出されます。世間知らずの学生であったかも知れませんが、今でもあの印象は間違っていないかっただと思えます。

先生が使う筆の動きを見ると、穂先の一本一本の毛まで神経が行き渡っているのではないかと思うほどの微妙でかつ力強い動きがあります。生まれてくる形をみると、この形以外にあり得ないと思われる的確な形と、どうしてここに点画があつてバランスが取れるのかと思われる絶妙な字形感覚があるように思います。まねようと思つて練習し、少し近づいたかと思つても、先生との差はほとんど変わっていないのに気付きます。その意味で、市澤先生は私たちにとつて、近寄りたいたい、すごすぎる先生だったのかも知れません。

ただあの頃、先生が単身で長野にいらしていたのを良いことに、私たち学生は一日中先生と過ごさせていただきました。ずいぶん失礼なことも、甘えたこともしてい

たように思います。先生は日常においても指導の場面でも、終始やさしく穏やかに私たちに接して下さり、近寄りがたいどころか、まったくその逆でいて下さいました。おそらくその感覚は、先生と接したことのある人すべてに共通するのではないかと思います。

先生のすごいところには相変わらず近づけそうにない私たちも、教師として常に穏やかに接したいと願う気持ち、先生から学んだものとして、共通して持ち続けているように思います。先生のご健康をお祈りいたしつづ。

(おしき ひでき 上越教育大学学校教育学部准教授)